

ドゥルーズにおける生の肯定の問題 ——存在のアナーキズムのために

赤 木 真 通

0. 問題の所在

現代資本主義社会における生は、生きづらさや不自由さ、閉塞感によって覆われている。そして、そのような社会的状況下で、生それ自身の持つ価値が見失われつつある。そのようなある種のニヒリズムは、資本主義社会の一見自由で豊かな装いの下で、生を絡めとり搾取する様々な権力装置（資本、国家、企業、テクノロジー etc）によって、目立たない姿で進行している。現代のわれわれの、空疎化し、無力化し、無化していく生の状況に対して、いかにして生それ自身に豊かな価値を見出し、いかにして生それ自身を最大限に肯定することができるかという問いを發し、その新たなパラダイムを模索することは、現代の哲学の喫緊の課題である。ドゥルーズにおいて、「肯定」（affirmation）という概念は、非常に重要な存在論的かつ倫理的、実践的意義を持っている。そして、ドゥルーズにおける生の肯定の哲学は、「新たな存在の仕方」（NP81）への根本的転換のための存在論的かつ実践的原理を提示している¹⁾。本論考では、生を肯定するということの意義を、主にドゥルーズのニーチェ論を手がかりに、生のアナーキズム的な実践として明らかにする。

1. 力の生産的原理としての力能の意志

ドゥルーズのニーチェ解釈において、「力能の意志」（volonté de puissance）の概念は、「肯定」の概念と密接に関わっており、存在論的かつ倫理的な意義を持っている。そこでまずは、ドゥルーズの力能の意志解釈の概略を力の概念との関連において見ておきたい。

力能の意志は、通俗的には、「主体が力能（権力）を欲すること」として解されるが、ドゥルーズはそのような解釈を退けている。ドゥルーズは、「力能の意志は、意志が力能を意志するということの意味しない」と強調している（NP96）。それでは、力能の意志とは何か。ニーチェは、「力能の意志は度合い、力能の差異性を（…）規定する」（VIII₁, 137）と言い、また、「力（Kraft）という勝ち誇った概念は、（…）補足を必要とし」、力の概念には、「力能の意志」、すなわち「創造的衝動」という「内的な世界が帰属させられなければならない」（VII₁, 287）と言う。ドゥルーズは、力能の意志を力（force）の差異的で発生的な境位であると解している。「す

すべての力は他の力との本質的な関係のうちに存在し、「力の存在は複数的なものであり」、複数的な諸力の関係における「距離」は、「それぞれの力の中に含まれた、それによってそれぞれの力が他の諸力と関係する差異的な境位である」(NP7)。ドゥルーズによれば、力能の意志とは「同時に差異的で発生的な、力の系譜学的な境位」であり、「そこ¹から同時に、関係し合う諸力の量の差異と、この関係において各々の力に回帰する質とが生じる境位」である(NP56)。それは、諸力を相互に規定し、関係し合う複数的な諸力の量の差異(=強度の差異)と、その諸力の質とを生産する差異的で発生的な境位である。また、「力能の意志は(…)本質的に可塑的な原理」であり、「条件づけられるものととともに変身し、自らが規定するものととともに各々の事例において自らを規定する」原理である(NP57)。力能の意志は、生の創造的衝動であり、諸力とその強度の差異とその質とを生産する、創造的で生産的な可塑的境位、自らが条件づけ規定する諸力とともにそれ自身も変形していく原理なのである。

そして、ドゥルーズは肯定と否定という概念を力能の意志の異なる質として論じている。ドゥルーズによれば、「肯定することと否定すること、価値評価することと過小評価することは力能の意志を表現している」(NP60)。否定、つまり「無への意志、生への嫌悪」もまた「一つの意志である」とニーチェは言う(GM, VI, 430)。力能の意志における肯定と否定の問題は、生の様式、実存の様式、存在の仕方に関わる問題である。それは「生の肯定(生の極限的な価値評価)と生の否定(生の極限的な過小評価)」の問題として展開されるのである(NP18)。それは、生それ自体に価値を認めるか、生それ自体には価値を認めず、生に優越した諸価値によって生を価値づけるかという問題であるとも言えるだろう。肯定と否定の問題は価値の問題と関わっている。意志は評価するものであり、「評価することによってはじめて価値が存在する」(Z, VI, 71)。力能の意志は「諸価値の価値がそこから生じてくるもの」である(NP61)。力能の意志は、諸価値とその諸価値それ自体の価値を生む境位であり、価値定立の原理でもあるのである。

さらに、力能の意志の質が肯定であるか否定であるかに応じて、それと親和的である諸力の質も異なってくる。それは、「能動的」と「反動的」の区別である。まず、能動的な力とは、「自らを変形することのできる」、「可塑的な力」、「変形の力」である(NP48)。さらに、それは「自身のなしうることの果てまで向かう力」であり、「自己の差異を享受と肯定の対象にする力」である(NP69)。能動的な力とは、自らを変形し、差異化し、そのなしうること、能力を最大限に展開しながら、その自己の差異を享受し肯定していく力なのであるが、それに対して、反動的な力は、その能動的な力を管理し、制限するように働く¹²。反動的な力とは「部分的な適応と制限からなる功利的な力」、「能動的な力をそれがなしうることから分離し、能動的な力を否定する力」、「自身のなしうることから分離され、自己自身を否定し、自己と敵対する力」である(NP69)。では、能動的な力と反動的な力は、どのように力能の意志と関わっているのか。

肯定する意志は、諸力が能動的になり、能動的諸力が優位を占めるように、諸力の関係を規定

し、否定する意志は、諸力が反動的になり、反動的諸力が優位を占めるように、諸力の関係を規定する。そこでドゥルーズが目にするのは、否定する意志と反動的諸力との結びつきである。「反動的諸力が能動的な力をそのなしうることから分離するとき、今度は能動的な力が反動的になり」(NP72)、「反動的諸力が(…)無への意志へと、能動的な力をゆだねる」ことによって「反動的諸力が勝利する」(NP73)。否定、無への意志、ニヒリズムという力能の意志の質は反動的諸力が自らを展開する境位であり、反動的諸力が能動的諸力に伝染し、能動的諸力までもが反動的になり、反動的諸力が勝利する境位なのである。「生の過小評価、生の否定は、その陰で反動的な生が自らを保存し、生き延び、勝利し、伝染的になる原理を形成する」のである(NP79)。

ドゥルーズは、否定と反動の結びつきを批判しており、それは重要な批判的意義を持っている。では、その反動的な生は、どのような仕方です自身を否定するのであろうか。

2. 否定する意志と力能の表象

ドゥルーズ＝ニーチェは、生の否定に対する根本的な批判を展開しているのだが、生の否定は、「表象」の問題に関わっている。そこで次に、否定する力能の意志と表象との関係について見ていきたい。

ドゥルーズ＝ニーチェが批判するのは、意志が意志するものとして力能を表象することである。力能の表象において、力能の意志は、否定するものとして現れる。否定する力能の意志とは、反動的な生の側から見られた、力能の意志の、つまり差異的境位の転倒したイメージである。「すべての貴族道徳は自己自身への勝ち誇った肯定から生れ出るのに対し、奴隷道徳は初めから、〈外部のもの〉、〈他なるもの〉、〈自己ならざるもの〉に対して否と言う」とニーチェは述べている(GM, VI, 284)。ドゥルーズによれば、「差異の転倒したイメージ」において、差異は「対立」に、「差異としての差異の肯定」は、「異なるものの否定」に、「自己の肯定」は「他者の否定」に置き換えられる(NP224)。反動的な生は、そのような否定する意志を原動力にして自らを展開する。そして、反動的な生は、力能を「表象の対象」、「再認の対象」として捉え、「力能の意志を、自らを承認させることとして理解し」、「自らを優越的なものとして表象することを、自身の劣等性を優越性として表象することさえも意志する」のである(NP91)。無力能者の反動的な生は、否定する意志において、力能を表象の対象にして、それを獲得し、自身に付与しよう(させよう)と意志し、その表象された力能の獲得や付与によって、自身の優越性を表象しよう(させよう)、承認させようとする意志するのである。

そして、以上のような表象が前提としているもの、それは既成の諸価値である。「既に現行の諸価値のみが、認められた諸価値のみが、再認の基準を与える」のであり、「自身を承認させようとする意志として理解された力能の意志は、必然的に、一定の社会における現行の諸価値(金銭、名誉、権力、名声)を自身に付与させようとする意志である」(NP92)。既成の諸価値に基

づいてしか、力能が表象され、承認されることはなく、優劣や勝ち負けも表象されえない。反動的な生は、既成の諸価値（資本、権力、人間性、国民＝民族性、労働、市場価値、競争力、有用性、進歩 etc）によって力能を表象し、それらを獲得し、自らに付与しよう（させよう）と意志する。そして、その既成の諸価値によって、生のあり方の優劣や勝ち負けを表象し、既成の諸価値の獲得や付与によって、自身の生の優越性や価値を表象しよう（させよう）と意志するのである。

さらに、そのような既成の諸価値による表象は、闘争や競争を必要とする。闘争や競争は「現行の諸価値の利益を受け取るであろう人々を規定」し、また「既成の諸価値につねに関係づけられることは闘争の特性」である（NP93）。ドゥルーズは、闘争の観念を批判し、力能の意志を闘争の観念によって理解してはならないと強調している³⁰。「闘争、戦争、競合という概念は、あるいは比較という概念でさえ、ニーチェと彼の力能の意志という考えに無縁」であり、「闘争は、弱者が強者に対して優位を占める際の手段」なのである（NP93）。

反動的な生は、闘争や競争を通じて、既成の諸価値の獲得や付与によって、力能を表象し、生の優劣、勝敗を表象する。そのように闘争や競争を通じて、既成の諸価値の獲得や付与によって力能を表象し、生を価値づけている限り、その生は反動的な生であることをやめないのであり、生それ自体は依然として否定され、過小評価されたままなのである。

反動的な生が自らを展開する否定する意志の境位とは、表象の境位である。反動的な生は、闘争や競争を通じて、既成の諸価値によって、力能を表象し、生の優劣や勝敗を表象し、生を価値づけるという仕方で、既成の閉鎖的な枠組みの中へと生を閉じ込め、異なるものを否定し、排除しつつ、生を規定する。そして、それが、生が否定される仕方なのであり、そのような否定の境位、つまり闘争・競争と既成の諸価値による表象の体制そのものから離脱することこそが、根本的な批判的意義を持つことになる。

3. 力能の意志の価値転換——認識根拠から存在根拠へ

ドゥルーズ＝ニーチェにおいて、否定から肯定へと、力能の意志の原理の質そのものを転換することが、存在の仕方の根本的な転換として論じられ、倫理的、批判的、実践的な意義を持っている。そこで次に、その転換のプロセスについて見ていきたい。

生の様式の、実存の様式の、存在の仕方の根本的な転換のプロセスは、「価値転換」（transvaluation）、または「価値変質」（transmutation）と呼ばれる転換プロセスでなければならない。ドゥルーズは価値転換について次のように述べている。

否定的なものの支配の下では、過小評価されるのはつねに生の総体であり、とりわけ勝利するのは反動的な生である。（…）ニーチェが価値変質、価値転換と呼ぶものは知られ

ている。すなわち、それは諸価値の変化ではなく、諸価値の価値が生じる境位の変化である。(…) 古い境位に依存している諸価値を破壊するのは、ただ諸価値の境位を変化させることによってのみである。今日までの既知の諸価値の批判が、一切の妥協を排して一つの根本的で絶対的な批判になるのは、批判が価値変質の名において、価値変質から出発して導かれる場合のみである (NP197-198)。

否定の境位にとどまったまま、ある反動的な価値を、別の反動的な価値で置き換えたところで全く何の批判にもならない。「価値転換」とは、「力能の意志の質の変化」であり、その時、「諸価値とそれらの価値は (…) 肯定そのものから生じ」、「ひとは生を過小評価する代わりに生を肯定する」ようになる (NP201)。つまり、根本的な批判と転換とは、諸価値そのものの価値が生じる境位としての力能の意志を、否定する意志から肯定する意志へと転換することなのである。

反動的な生は、否定の境位において自らを展開するのであるが、ドゥルーズは価値転換における否定の根本的な転換点に注目している。それは、否定と反動との結びつきが絶たれる地点である。ニヒリズムを極限まで生き抜くことで、ニヒリズムをそれ自体によって克服する道もまた同時に開けてくる。ニヒリズムの極限においては、既成の諸価値による表象の体制に対する批判的意志が生じ、それに従属した反動的な生の能動的な自己破壊が生じるのである。ニーチェによれば、反動的な生を「ニヒリズムから守ってくれた」「道徳への信仰が没落するとすれば」、反動的な生は「その慰めをもはや持たなくなり、そして没落する」のであり、それは、「自己破壊の本能の、無への意志の本能の意志としての破壊への意志」における、反動的な生の「自己没落」として現れるのである (VIII, 219)。そのとき、否定する意志においては、反動的な生が自らを破壊して、生の諸力が能動的になる。「諸力が能動的になるのは、反動的諸力が、少し前までなおも自分たちの保存と勝利を保証していた原理の名において、自らを否定し、自らを消滅させる限りにおいてである」とドゥルーズは述べている (NP80)。そして、否定が反動的な生そのものの否定になるということは、否定が肯定する力能へと価値転換されるということである。ドゥルーズは、否定の価値転換について次のように述べている。

否定的なものは肯定する力能になる。それは肯定に従属し、生の過剰に仕えるようになる。否定とは、もはや生が自己のうちに反動的なもの全てを保存する形態ではなく、反対に、生がそのあらゆる反動的諸形態を犠牲にする行為である (NP202)。

価値転換した否定は、生の充溢から生じ、生の肯定を告げる批判と破壊の営為である。その否定は、既成の諸価値、表象の体制と、それらに従属した反動的な生そのものを根本から批判し、破壊する肯定的力能になるのである¹⁴。

さらに、否定と肯定は、力能の意志の認識根拠 (ratio cognoscendi) と存在根拠 (ratio essendi) でもある。ドゥルーズによれば、「ニヒリズム、無への意志は、(…) 力能の意志一般の認識根拠」であり、「既知の、認識可能なあらゆる価値は、本性上この根拠から生じる諸価値である」(NP198)。否定とは、力能の意志が「認識される」根拠であり、力能の意志の認識根拠としての否定において、「既知の」、「認識可能な」、反動的諸価値が生じ、反動的な生がそれらの諸価値によって力能を表象し、自身に敵対して生を否定しつつ自らを展開するのである。それに対して、肯定は、「力能の意志一般の存在根拠」であり、その力能の意志が「存在する」根拠から「今日まで未知の諸価値が生じる」(NP199) のであり、それは「未知の存在根拠」(NP202) であるとも言われる。したがって、否定から肯定への価値転換は、力能の意志の認識根拠から存在根拠への価値転換である。そして、その価値転換において、否定は、肯定そのものの「存在の仕方」になるのである (NP205)。

それでは、以上のような価値転換によってもたらされる肯定とはどのようなものであろうか。その肯定の概念は、どのような存在論的、倫理的、実践的原理へとわれわれを導くのであろうか。

4. 肯定の実践的原理としての一義的存在のアナーキズム

ドゥルーズにおいて、生の肯定とはどのような意義を持っているのであろうか。そこで最後に、存在の一義性概念とも関連させつつ、生を肯定することの存在論的、実践的意義を明らかにしたい。

まず、ドゥルーズ＝ニーチェは二種類の肯定をはっきりと区別している。それは、否定に従属した肯定か、否定に従属させる肯定かということである。否定に従属した肯定をニーチェは「驢馬の肯定」と呼んでいる⁽⁴⁾。それは、「否定的で否定するものすべて、否定されうるものすべてに〈然り〉と言う」こと、つまり「担うこと」、「引き受けること」としての肯定である (DR75)。つまり、否定の力能を原動力とし、否定に従属した肯定とは、既成の諸価値とそれに従属した反動的な生を引き受け、担うことである。言い換えれば、その偽りの肯定は、否定的なもの、反動的なものに「〈否〉と言うことを知らない〈然り〉」である (NP208)。肯定の力能へと価値転換した否定を伴わない肯定は、真の肯定ではありえない。それは既成の諸価値と既成の表象の体制を受諾することしかできない反動的な生の単なる現状容認にすぎないであろう。真の肯定は批判と破壊の力能へと転換した否定を先に伴わなければならないのである。それでは、真の肯定とは何を意味するのか。ドゥルーズは、肯定することについて次のように述べている。

肯定することは、存在するものを請け負うこと、引き受けることではなく、生きているものを解放し、その荷を降ろすことである。肯定すること、それは(…) 優越的諸価値の重荷の下で生を担うのではなく、生の価値であり、生を軽く能動的なものにする新たな

諸価値を創造することである。創造が存在するのは、厳密に言えば、生をそのなしうることから分離するのではなく、われわれが過剰を用いて生の新たな諸形態を発明する限りにおいてである (NP212)。

肯定することは、創造することにほかならない。ニーチェにおいて、「意志は創造者である」(Z, VI, 177)。ドゥルーズによれば、「肯定はそれ自身の差異の享受と戯れ」であり、「肯定は、最初は多様なもの、生成、偶然として定立される」(NP216)。また、「差異は肯定」であり、「肯定そのものは多様であり」、「肯定は創造であるが、(…)それ自身における差異として創造されなければならない」(DR78)。肯定とは、それ自体において、差異、多様なものであり、差異化、多数多様化、生成のプロセスにほかならない。また、肯定する意志が創造する価値とは、生それ自身の未知の価値である。ニーチェは、「生自身が力能の意志であるとすれば」、「生において、力能の度合い以外に価値を持つものは何もない」と述べている (VIII, 219)。生自身における差異、自らを差異化、多数多様化し、生成する生自身にこそ価値があるのであり、そのような生それ自身の諸価値は、絶対的に内在的で、特異的で、多様な諸価値でしかありえない。生を肯定するとは、生がなしうることをなすことによって、生の多様なあり方を創造し、生の多様な諸価値を創造すること、言い換えれば、いかなる表象の枠組みへとも還元不可能な、過剰なものである生を差異化、多数多様化し、生の諸力の強度を増大させ、生それ自身の還元不可能で、特異的で、多様な諸価値を創造していくことなのである。

そして、力能の意志の存在根拠としての肯定は、それ自体が反復されなければならない。生の肯定は反復されることによって全的なものになり、また生の肯定は反復的な本性を有している。「回帰することは肯定の特性であり、自己を再生産することは差異の特性である」(NP217)。そこで、生を肯定する意志を全的なものにし、肯定の反復的な本性を表現しているのが、「永遠回帰」である。ニーチェは、「意味も目的もないが、不可避免的に回帰する、あるがままの生存」としての永遠回帰を「ニヒリズムの極限形式」と述べている (VIII, 217)。また、「すべてのものが回帰するということは、生成の世界と存在の世界とを極限的に接近させることである」とも述べている (VIII, 320)。そこで、その意義についてドゥルーズがどのように論じているかを見ていこう。まず、ドゥルーズは、永遠回帰を同一的なもの、否定的なもの、反動的なものの反復として捉えることを退ける。ドゥルーズによれば、永遠回帰とは、「遠心性の運動」であり、「絶えず脱中心化」し、「差異こそがその中心にある」円環である (DR77-78)。永遠回帰の遠心的運動は、否定的なもの、反動的なものを、回帰の円環から篩い落とす。「永遠回帰は否定を反動的諸力それ自体の否定にし」、「永遠回帰によって／において」、「否定は肯定へと価値変質する」(NP79-80)。永遠回帰は「否定的なものの回帰は存在しない」ということ、「肯定するもの、あるいは肯定されるもののみが回帰する」ということを意味している (NP217)。否定を批判と破

壊の肯定的力能へと転換するのが永遠回帰であり、永遠回帰においては、否定や反動的な生は反復されず、肯定のみが反復されるのである。

以上のような永遠回帰を、ドゥルーズは存在の一義性として定義している。ドゥルーズによれば、「永遠回帰は、存在の一義性であり、この一義性の現実的な実在化である」(DR60)。存在の一義性はドゥルーズの主要概念であるが、では、存在の一義性は永遠回帰との関連でどのような意義を持っているのだろうか。「永遠回帰は存在であり、存在は選択である」と、そして、その選択とは「本性の変化なしには存在のうちに入りえないもの」、すなわち強度の差異を「存在のうちに入らせること」であるとドゥルーズは言う(NP80)。ニヒリズムの極限形式としての永遠回帰＝一義的存在は、あるがままの生存、実存の反復なのであるが、それは、否定と反動を破壊しつつ、生をその強度の差異において反復することにほかならない。ドゥルーズは、一義的存在について次のように述べている。

回帰するということは存在であるが、それはただ生成の存在である。(…) 永遠回帰はただ、(…) 力能の《意志》の諸々の変身と仮面の演劇的世界についてのみ、この《意志》の純粋な諸強度の演劇的世界についてのみ言われるのである。永遠回帰、回帰することが表現しているのは、すべての変身の共通な存在、すべての極限的なものの、実在化された度合いとしての力能のすべての度合いの、尺度そして共通な存在である(DR59-60)。

力能の意志の存在根拠であるすべての肯定を、すなわち力能の意志のすべての強度の差異を横断する唯一の共通の存在こそが、永遠回帰＝一義的存在である。一義的存在は肯定、差異、生成であるが、それは「倍加された肯定」、「最高の力能にまで高められた差異」であり、「生成の存在」、「多様なものの存在」、「差異の存在」である(NP217)。一義的存在とは、肯定の、差異(＝強度)の、多様なものの、生成の存在、反復なのであり、反復され、最高の力能へと高められた肯定、差異(＝強度)、多様なもの、生成なのである。

ドゥルーズはアルトーの言葉を借りて、そのような「一義的《存在》」を「戴冠せるアナーキー」とであると言う(DR55)。生の肯定の実践的原理としての存在の一義性を、存在のアナーキズムと呼ぶことができるだろう。アナーキー＝一義的存在は、否定から肯定への価値転換をもたらし、否定を批判と破壊の力能へと転換する。それは、生を閉鎖的な枠組みへと従属させ、閉じ込める、あらゆる既成の諸価値とその表象の体制と、それに従属した反動的な生を破壊するのである。存在の一義性というアナーキズム的な実践的原理においてこそ、いかなる表象の統一的で閉鎖的な枠組みもなく、生が差異化、多数多様化され、生それ自身の特異的で、多様な諸価値が創造される、つまり生が肯定されるのであり、生の肯定のみが反復されるのである²⁴。

以上のことから、生を肯定するということは次のことを意味する。すなわち、それは、一義的存在において、既成の諸価値と表象の枠組みを批判し、破壊しつつ、生を差異化、多数多様化し、生をその強度の差異と多数多様性において反復すること、そのようにして、生それ自体の特異的で、多様な諸価値を創造することなのである。そして、それは一義的存在のアナーキズムにおける、生の多元論的な実践にほかならないのである。

おわりに

生の肯定は、存在の一義性における生のアナーキズム的な実践なのであるが、そのアナーキズムの問題は共同性の問題と不可分である。アナーキズムは共同性においてのみ実現し、また共同性はアナーキズムに基づいていなければならないと言えるだろう。存在の一義性は、生の肯定のアナーキズムの原理であるが、それを生の共同性の原理としても構想する必要がある。また、生が身体性と不可分である以上、生のアナーキズムと共同性は、身体性のレベルに基づいていなければならない。ドゥルーズにおいても身体の問題は極めて重要であり、それは彼のニーチェ論やスピノザ論においても、ドゥルーズ／ガタリにおける「器官なき身体」の概念においても一貫している。生のアナーキズム的な肯定の問題を、身体と共同性の問題との関連で捉え、ドゥルーズ（／ガタリ）における存在の一義性や、器官なき身体の概念を手がかりに、アナーキーな生のあり方をその共同性と身体性において考察することを今後の課題としたい。

注

- (1) ドゥルーズの著作からの引用は以下の略号で示し、頁数を括弧内に表記した。

Gilles Deleuze, *Nietzsche et la philosophie*, Paris, P.U.F., 1962 [NP]

Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, P.U.F., 1968 [DR]

また、ニーチェの著作からの引用には、Gruyter 版のニーチェ全集を用い、巻数と頁数を括弧内に表記した。

Nietzsche, *Nietzsche Werke kritische Gesamtausgabe*, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Berlin, Walter de Gruyter, 1967ff

なお、ニーチェ全集の中の以下の著作に関しては、その略号を巻数の前に記した。

“Also sprach Zarathustra” [Z], “Zur Genealogie der Moral” [GM]

- (2) ニーチェは能動的な力を「形態化し、内から形式を創造する」力であるとし (VIII, 312)、「新たに方向づけ、形態化する諸力」の後に初めて「適応」という「反動性」が続くとしている (GM, VI, 332)。
- (3) ニーチェはダーウィニズムを批判しており、ダーウィニズムにおける有用性とは「他者との闘争において自らを好都合のものとして証明すること」であるとしている (VIII, 317)。
- (4) ハートは、ドゥルーズ＝ニーチェとマルクスとの共通性を指摘し、価値転換の批判的実践を、資本主義社会における労働の拒否を通じた労働者の自己破壊という文脈で読み替えている。「労働者が真の肯定の、自己価値創造の地点に到達しようとするなら、その攻撃は〈本質〉に、すなわち労働者をそのようなものとして定義している諸価値に——奴隷状態に対して、労働に対して——向けられなくてはならない」(Michael Hardt, *Gilles Deleuze: An Apprenticeship in Philosophy*, Minneapolis, University of Minnesota Press, 1993, p.44.)。

- (5) 「担うこと」としての驢馬の肯定については、『ツァラトゥストラ』第3部「重力の精について」参照。
- (6) ドルーズにおいて、存在は生の実践の開かれた領域以外のものではなく、倫理的な実践によって構成されるものである。ハートは、「ニーチェにおいて存在は所与のものではなく、意志されなければならない」であり、「存在としての永遠回帰の原理は、倫理的な意志としての生成的な意志である」と述べ、永遠回帰の倫理的、実践的意義を強調している (Hardt, *Gilles Deleuze*, p.49.)。